



TITLE:

易の龍と廣東の天龍

AUTHOR(S):

後藤, 朝太郎

CITATION:

後藤, 朝太郎. 易の龍と廣東の天龍. 天界 1940, 20(231): 276-276

ISSUE DATE:

1940-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168026>

RIGHT:

鮮かなこともある。コロナは水滴の雲に多く現はれる。これは暈と異り光線の廻折作用による現象で、輪の外側が紅色を呈する。巻積雲、高積雲の如き團塊の雲では、往々全圓をなさず、その一部分のみを現はすことが多い。

ビショップ環 (Bishop's Ring) 幅廣い光輪で、内径が10度ぐらゐ、外径が20度もあるので、暈と間違へられるが、外側が紅色の爲め區別が出来る。これは雲層に出来るものではなく、細かい火山灰が空中高く噴き上げられたために生じるもので、日光の廻折現象である。1883年八月クラカトア火山の大爆發の際この現象をハワイのビショップが發表したので、この名が出た。(「讀賣新聞」より)

易の龍と廣東の天龍

後 藤 朝 太 郎

支那に於ける龍の起原は先づ文字の上から考へると、その3代に於ける龍は正しく音符の「竜」と肉の字の象形とそれとその右半のものから組立てられてゐるのである。殷代龜甲獸骨の卜辭の上にも見出さるゝが、その形は足のある一種の爬蟲類として考へられる。それが果して地質學上古生物時代の大爬蟲類を暗示したものであると斷するわけにはいかぬ。周易の易の字は元來はトカゲ易(蜥蜴)であるのだが、その易の姿は繪のやうに古くは描かれてゐる。でもとはカメリオンの如き動物であつて、色のよく變化する所からとられてゐるのである。易は變易なりとも云はれてゐる。古くから又變易で立派に通つてゐる。所がこの龍の方は爬蟲類で相當高い所にも登るのである。廣東廣西兩省にまゐると樹上に攀登する爬蟲類が今日實在してゐる。廣東人は之をテンルン天龍と稱してゐる。

自分は廣東の市場で求めて來たと云ふ天龍を市中で見た。幾匹か長壽街兩儀軒の主人から見せてもらつた。箱の中からとり出して尾の所を摘んでぶらさげる。すると首を上の方へ持ちあげて來て舌をペロペロ出して來る。身長は4尺4,5寸、そして、それに退歩した足が4つ付いてゐた。全體の姿は蛇そつくりなのである。唯4肢を有する所が違ふのみであるが、トカゲ(蜥蜴)ではない。廣西の梨州の郊外にまゐるとこの天龍は、榕樹の森の樹枝にも棲息してゐると云つてゐた。親しく自分の見たものは薄黃色を呈してゐたと記憶する。これが果して周代又はそれ以前からの龍そのものに一致してゐるかどうかは未詳なるも、採つて以つて參考とするに足りしものであると思ふ。

(「支那文化に見る龍」より)